

漢字はひらがなよりやさしい

大脳生理学が理論的に裏づける

では、漢字とひらがなでは、どちらがやさしいと思いますか。はっきりにしているのは、“読み”と“書き”のうち、少なくとも“読み”については、小学低学年までは、漢字のほうがひらがなよりずっと覚えやすく、興味をもちやすい文字であることがわかっています。これは、大脳生理学的な見地からも明らかにされていることなのです。

まず「小学校低学年までは」という“期限”に注目してください。

私たち人間がこの世に生まれ出たときの脳は極めて未熟な状態であり、そこからどんどん発達していくわけですが、臨界期といって、一定の時期までに習得しなければ獲得できない能力があるとされます。

たとえば、ピアノの微妙な音階の違いを判断できる臨界期は六、七歳までではないかといわれています。

人間の記憶力についていえば、たとえば、上の表を見るとわかりますように、機械的記憶(記憶とは、経験したことを印象として刻み付けることです)と、論理的記憶では、その発達にかかわる脳の場所も時

期も異なることがわかっています。

機械的記憶の力は〇～三歳がもっとも高く、「丸暗記力」ともいいます。興味がわかれば、何でも即座に記憶してしまう能力です。

赤ん坊の脳は未熟ですから、自分を取り巻く生活環境を無条件に記憶し、模倣することで、人間として生きていく能力を身につけていくことになります。

ですから、この時期に丸暗記力が最高というのうなづけます。これは、小学校低学年に当たる七、八歳くらいまで高い水準を示します。

もう一つの論理的記憶の力とは八、九歳くらいからぐんと育つ、理づめで考える能力をいいます。物事を論理的、体系的に理解し、認識する能力です。この八、九歳くらいの時期は、自分で考え、自分を主張し、自主的に行動するようになります。自我の発現や創造の精神ができあがる時期とも重なっています。

さて、漢字は意味やイメージを具体的に表していますから、幼児～小学校低学年の子供には絵を見るのと同じように抵抗なく受け取れま

す。たとえば「山」は、現実の山と同じように受け止められます。いわば漢字は「目で受け取る」言葉(視覚言語)なのです。一方、ひらがなやカタカナは、一字一字が音を表すだけで、何の意味もありません。ですから、幼児～小学校低学年の子供の興味や関心を強く引くのは、ひらがなやカタカナよりも漢字ということになります。

しかも、漢字は複雑な形をしているので、記憶の手がかりが多く、それ故に、かえって識別しやすいのも特徴です。したがって、漢字を読むことだけでいえば、丸暗記力に優れた幼児期～小学校低学年の時期は、意味のないひらがなやカタカナよりも意味のある漢字のほうがやさしくマスターできることがわかりいただけだと思います。